



津村信夫詩集

神保光太郎編

白 凰 社

西脇順三郎・浅野晃・神保光太郎／監修

青春の詩集 ⑬

津村信夫詩集

© 1965

昭和40年11月1日 第1刷発行

¥400.

著作者 津 村 信 夫

編 者 神 保 光 太 郎

発行者 高 橋 謙

発行所 株式会社 白 凰 社

東京都千代田区神田神保町1-20

振替口座番号・東京92241番

電話・東京291-8365番

落丁・乱丁本はお取り替えます。 大文堂印刷・和田製本

津村信夫詩集

神保光太郎編

白 凰 社

津^つ
村^{むら}
信^{のぶ}
夫^お
詩集

神^{じん}
保^ぼ
光^{こう}
太^た
郎^{ろう}
編

目次

愛する神の歌

二

雪球

旅装

三〇

小扇

三

臥床

二

矜持

三

養蜂

三

ローマン派の手帖

三

花樹

三

鴉影

四

春の航海から

四

可愛い妖怪

四

味爽

五

夕方私は途方に暮れた

六

馬小屋で雨を待つ間

六

銅版画

七

花にとけた鐘

七

父が鉄をもつて

八

橙娘

八

落葉松

八

雪の誘ひ

九

咳

九

雪と膝

三〇

林檎の木

三

千曲川

四

山脈地方の手紙

三

長野

四

OLD SONGS

三

林檎園

五

林間地

四

善光寺平

五

山ずまひ

五

戸隠

五

ETUDE

五

山の湖畔で

三

日記

五

往生寺

三

孤児

六

星へ

五

晴夜

五

吹奏楽

四

雪のやうに

四

屋上庭園

五

ある雲に寄せて

四

姉の庭

五

若い旅で

四

若年

五

抒情の手

四

海の想ひ

五

追憶

四

就寝時

五

高原

四

手紙

五

秋の歌

四

愛する神の歌

六

春の噴煙

四

海岸線

三

肱をついて

生涯の歌

家鴨と少年

私弁

睡眠

吾が家

夕暮

仕事

父のゐる庭

詩人の出発

冬の旅

秋風

川中島を望む

駅前旅館

虫をめづる夜

小児の絵筆の想ひ出に

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

白樺

天の川

静かな少年

大倉村の手紙

晴れた日のわかれ

山懐

林間詩

太郎

寂しい村で

月夜

父

鳩

父が庭にゐる歌

紀の国

晩夏

田舎

八

八

八

八

八

八

九

九

九

九

九

九

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

春の歌
 南で
 夕暮
 稲妻
 旅行者
 木の実
 みづ絵
 魚を喰べる
 鄙の歌
 風土によせて
 飯山
 緑葉
 早春
 戸隠姫
 戸隠びと
 炉
 厨

一〇六
 一〇八
 一〇九
 一一〇
 一一一
 一一二
 一一三
 一一四
 一一五
 一一六
 一一八
 一二〇
 一二一
 一二二
 一二三
 一二四
 一二五
 一二六
 一二七

吹雪
 雪尺余
 はるかなものに
 詩人の枕
 晩夏
 月
 晩秋
 狐館
 水ぎは
 熊
 昼を愛する歌
 父と娘
 荒地野菊
 冬の夜道
 冬の少年
 炉のほとり
 白髪

一八
 二〇
 二一
 二二
 二三
 二四
 二五
 二六
 二七
 二八
 二九
 三〇
 三一
 三二
 三三
 三四
 三五
 三六
 三七

聖女

一五

春

一五

牛のこと

一五

空地

一五

子供の好きな少女に

一五

椿

一五

冬夜鴨を煮る

一五

父なきのち

一五

夏草

一五

詩人の生涯（神保光太郎）

一五

鑑賞ノート（鈴木 亨）

一五

索引

一五

一、本集の本文については、次の方針に従って編集した。

(1) 当用字体を有する漢字は、当用字体を使用した。

(2) かなづかいは原詩のままとした。したがって、ルビ（振りがな）は旧かなづかいによった。

(3) ルビは、従来の諸版を参考にして、編者の責任において付した。

一、詩句については、矢代書店版『さらば夏の光りよ』（昭和二十三年刊）を底本としたが、四季社版『愛する神の歌』（昭和十年刊）、臼井書房版『父のゐる庭』（昭和十一年刊）湯川弘文社版『或る遍歴から』（昭和十九年刊）も参考にした。

愛する神の歌

小^こ
扇^{あふぎ}

——嘗つてはミルキイ・ウェイと呼ばれし少女に——

指呼^{しこ}すれば、国境はひとすぢの白い流れ。

高原を走る夏期電車の窓で、

貴女^{あなた}は小さな扇^{あふぎ}をひらいた。

矜^{まよひ}
持^{もち}

とまれ、一つの矜^{まよひ}を持つことは、

橋や建物たてもものは、ときに奇妙きみょうに訝々きえぎえしい影を落す、川波かはなみに、地の面おもてに。
それに見入みいるのは私わたしだ、私はいそいで衣服いふくを脱ぬぐ。

あらはな胸はくに白鳥はくてうをだき、その羽搏はばきに、耳みみを藉かす。

問ふ勿なれ、ひとよ、

かくも明らかに鼓動こどううつ、このひとときの私の曠衣はれぎの心を。

ローマン派の手帖

その頃ころ私わたしは青い地平線ちへいせんを信じた。

私はリンネルの襯衣しんやの少女せうぢよと胡桃くるみを割りながら、キリスト復活しよっかの日の白鳩しろばとを讃たたへた。私の藁蒲団わらぶたんの温ぬくもりにはグレーチエン挿話さふわがひそんでゐた。不眠ふみんの夜よるが暗い木立こだちに、そして気がつくと、いつもオルゴオルが鳴つてゐた。

鴉影

活火山の麓で時間があまりに私達には明るすぎる。

白樺の椅子に雲が影を、影には昨日がたたずむ。

少女が、少女の跽音が明確に私の心の梯子を降りて行く。

落葉樹に私は鴉影を認めた、(私は語彙を持たない。)

夕映が落葉松の林を染める、私は文字を忘れた。

夕方、それに何の不思議があるものか、私は発熱する。

可愛い妖怪

少女よ お前は成長を知らない。

夕暮れがすっかり白樺の小徑を化粧する、
もうお前に残つて居るものはランプの下の縫物と夜の御祈禱。

少女よ 今夜はマリヤ様になんとお祈りを捧げるのか。百舌が林に鳴く頃になつても、もうあんまり不幸な目には逢はぬ様に、谿間には美しい物語が落ちてゐるやうに、鹿の感情がいつもながらに優しくそれで居て眸に憂愁の波紋があるやうにと。

そして小声でつけ加へるだらう。

「シンネエヴェは何日になつたら樅丘に嫁ぎますか」と。

少女よ お前可愛い妖怪。

(シンネエヴェとはビヨルンソンの小説の女主人公の名前。)